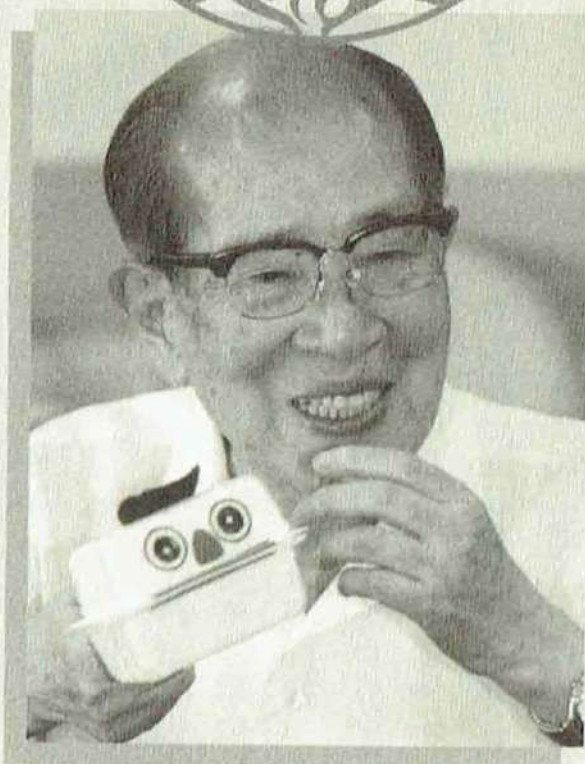


101
歳



コスモスの如く、子どもたちと生きる

昇地三郎

教育家・教育学博士
しいのみ学園園長

明治三十九年（一九〇六）八月十六日〜

池田知隆 ● ジャーナリスト

脳の若さを保つ

「ただいま百歳、脳は三十代」——
障害児のための教育施設「しいのみ
学園」（福岡市）の園長、昇地三郎しやうちさぶろうさ
んは、いくつになっても若々しい。
平成十七年（二〇〇五）から翌年
にかけて、世界一周講演旅行も続けた。
NHKスペシャル「老化に挑む」が
とらえた昇地さんの脳精密画像デー
タが欧米の科学者たちの強い関心を
集めたからだ。

人間の脳は老いとともに細胞の数は減っていくが、刺激を与え続ける限り、神経回路がつくられることが最近の研究で明らかになっている。脳はよみがえるのだ。

まず百歳の暮らしぶりは——。

健康法

毎日午前七時、毎朝の体操で始まる。タオルを水に浸して全身をこす

る「冷水摩擦」は結婚後、六十年余続いている。黙ったままだと気が抜けるので「人生は自分自身との戦いだ」とかけ声をかける。意志鍛錬のためだ。

剣道二段の腕前で、独自に昇地式棒体操を発案。自作の棒を足の間に挟み、足腰を鍛えながらバランス感覚を保つ。

「頭を常に使え。この世で使え」

幼いころによく聞かされた母の言葉を「常に本を読め。ちゃんと勉強せよ」と理解し、毎朝、ラジオでハングル講座と中国語講座で学んでいる。毎日決めた時間に、決めた方法で勉強するのが大切で、「やむをえず為す、これを為すという」と口に出し、自らを励ましていた。医学、文学、哲学、教育学と四つの博士号を持つ。「二日一知」。一日に一つでも新しいことを知ることは生きる喜びでもある。

「一日三十回嘔む」

三歳のころ、母にしつけられ、汁かけごはんやおじやは食べない。みそ汁などの汁物は途中で飲まない。三十回嘔むことで、唾液で食べ物を消化して、胃液が薄まらないようにする。よく嘔むと精神的な満足感もある。

三つ子の魂と交流

一番興味があるのは三歳児。「三歳児が人生の勝負どころ」と手作りのおもちゃによる「親子愛情教室」を毎月開き、三歳児とのふれあいの場をもっている。ピアノを弾くこともある。オリジナルのおもちゃは五千種を超え、この教室を世界中に広めるのが夢だ。

今や「九十九歳までは子ども。百歳からが人生の本番」とばかりに夢の実現に向けて精進しているが、その姿はまるで子どものように生き活

きとしている。だが、その人生は波乱万丈だった。

昭和二十九年(一九五四)、障害をもった二人の息子らのため、大学教授だった昇地さんは私財をなげうって日本初の障害児の教育施設「しいのみ学園」を創設。それ以来、園長として障害者教育に取り組んできた姿は映画化され、よく知られている。百年生きてつかんだ「生き方の秘訣」となると、次のとおりだ。

五十代はいわば「人生の花道」。それからどう生きればいいのか。自分の人生の花を開かせている時期でもあると昇地さんはいう。年代別に昇地さんの人生をたどってみよう。

●「六十代は海外飛躍のとき」

六十歳のとき、旧ソ連で開催される国際心理学会に日本代表として出席することが決まり、ロシア語の勉強を始めた。六十三歳で、福岡教育大を定年を迎え、韓国の大学に招か

れたのを機に韓国語を学び始めた。人生の出会いを大切にして、自分の持っているものを広く外国へ。

●「七十代は、しょぼくないでイキイキと自分を鍛える」

七十代になると、長男が他界し、その年に養護学校義務化となった。「しいのみ学園」の運営が難しくなったが、家にじっとひっこんでいたら、だめになる。どこへでも、でかけていかななくてはならない。

●「八十代は、若さは半分の四十代のつもりで」

八十代になって、だめだと思ったら、その日からだめになる。しかし、がんばると気力がでてくる。台湾、韓国などの国際学会での講演が続く。四十代のつもりで、いつも自分を励ましてきた。

●「九十代でも遅くはない」

九十代に入ると、難病・パーキンソン病にかかり、十年の闘病生活を

していた妻が八十二歳で他界。車椅子から寝たきり生活に入っていた次男、前日まで元気だった長女が先立った。だが、「自分は中学三年生だ」と十五歳の意欲で勉強すればいい。九十六歳から中国語を勉強して、中国へ。記憶力が減退したとかだめと思わずに、勉強を続けた。

●「百歳まで生きて、元気に仕事を

するために自立する」
「百歳記念日本縦断—世界横断講演」を計画し、講演の際には一時間半から二時間、腰にかけず話してきた。九十歳で全県制覇を実現したあとの目標は外国。韓国語は通訳無用の講義をし、中国語、英語、ドイツ語で講演した。

道端に咲くコスモス

このように昇地さんは、いつも「常に前進！ 人生は自分自身との戦いなり」と思って生きてきた。教育の

仕事は、常に新しきものへの挑戦で、物事を教えていくことは、子供に対して常に前進が求められる。その一方で、風が吹けば風になびき、苦しむことがあれば苦しさに耐えるのも人生だ。「禍を転じて福と為す」という人生そのものだと昇地さんは振り返る。「桜の花のようにぱっと咲く人間ではないが、コスモスの如く道端に咲いているのが私です」

昇地さんの好きな言葉は、
「小さきは小さきままに
折れたるは折れたるままに
コスモスの花咲く」

自分でできる精一杯のことをして生きる。そして人に喜ばれ、役立つ存在になることが、人が生きる目的だという。

(参考文献)

「100歳先生の「生きる力」を伝える幼児教育」(生活人新書 NHK出版)

「ただいま100歳 今からでも遅くはない」(知知出版社)